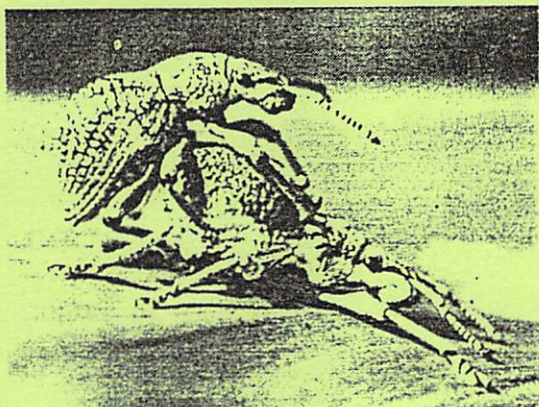


HITOTSUBATAGO NO. 10

ヒツバタゴ



10

対馬の自然と生き物の会

December 1994

レッドデータブックに見られる対馬の昆虫類

うらた あきお
浦田明夫

日本の絶滅の恐れのある野生生物について、環境庁は先に脊椎動物編をまとめたが、更に、1991年に無脊椎動物編を公表した。そのための基礎資料として、1986年より4年間環境庁によって「緊急に保護を要する動植物の種の選定調査が実施された。この調査によって選定された昆虫類の種数は207、各目ごとの数は表に示すとおりである。

目	カテゴリー	Ex	E	V	R	Lp
コウチュウ		2	12	5	38(1)	
ガロアムシ			1			
トンボ			2(1)	1	38	
カメムシ			3	3(1)	9(1)	1
ハエ			1	1	2	
チョウ			4	4	42(4)	
ハチ				1	31	
バッタ					2(1)	
アミメガゲロウ					1(1)	
シリアゲムシ					2	
トビケラ					1	
	207(10)	2	23(1)	15(1)	166(8)	1

Ex : 絶滅種

E : 絶滅危惧種

V : 危急種

R : 希少種

Lp : 保護に留意すべき地域個体群

註 : () は対馬産昆虫類の選定種数

昆虫類のレッドデータブック記載種（亜種を含む）の数

分類のカテゴリーは、日本版レッドデータブックに記載する種を選定し、絶滅種（Ex）、絶滅危惧種（E）、危急種（V）、希少種（R）、および保護に留意すべき地域個体群（Lp）の5つに区分し、それぞれの選定種について生息状況をまとめている。

分類の段階で、昆虫類は「目」の呼称などが若干既成概念と異なるが、特に混乱はないだろう。また分類単位の取扱い方は、複数の亜種が認められている場合は亜種まで、それ以外は種を単位としている。

本報告は昆虫類以外の無脊椎動物にはふれないことにする。なお、選定種の概説は「日本の絶滅のおそれのある野生生物」（1991）無脊椎動物編によったが、若干コメントを加えた。

選定種対馬の昆虫類

○ヒヌマイトトンボ（Ex）トンボ目 イトトンボ科

1971年に水戸市校外で発見された日本固有種のイトトンボである。本州中部の太平洋岸の大河の河口部のところどころを生息地としている。しかし、つねに汚染と河岸河洲の埋立ての脅威下であり、すでに数ヶ所の産地では絶滅している。

対馬でも記録されているものの、特異な環境に生息する日本特産種だけに、その生息は危ぶまれている。

○タガメ（E）カメムシ目 コアオイムシ科

大型の水性昆虫で、体長は48～65mm、体は褐色で前脚はとくに太く、捕獲脚となる。日本では全国的に分布するが、産地は極めて局所的で個体数も少ない。水域汚染、水際環境の破壊、街灯の増加などにより、近年はとくに減っている。

対馬では30年位前に記録されて以来、その後の確認はないように思われる。

○ツシマフトギス（R）バツタ目 キリギリス科

狭い面積にしか見られない大型種として選定。対馬固有種で森林依存種である。成虫は林床に見られることもあるし、樹上に見られることもある。肉食性が強く、小型昆虫を捕らえて食す。森林と林縁草地を生息環境として保全する必要がある。

本種は林縁の草地によく見られ、特に希少種ではない。

○チョウセンケナガニイニイ（R）カメムシ目 セミ科

体長20～26mm。ニイニイゼミより丸味が強く、体表には毛が密生する。秋季（10月）に出現し、コナラ、アラカシなどの広葉樹上で生活する。日本では対馬だけに分布する。最近、樹林の伐採により、減少している。

対馬では山地に見られ、全島的にもその分布は局地的で、樹幹の高いところに静止することが多く、発見しにくい。

○ツシマカマキリモドキ（R）アミメカゲロウ目 カマキリモドキ科

生態などほとんど分かっていない。初夏に雑木林で得られ、クリの花に飛来する。対馬固有種として南方系種群の北の分布限にあたる。生息域が開発されやすい場所であり、保護が望まれる。

我々の採集の対象となる種ではないので、目立たないが、有明山の山頂には比較的多いように思われる。

○ミカドアゲハ（R）チョウ目 アゲハチョウ科

九州では全県下および対馬に分布する。幼虫の食草はオガタマノキ、タイサンボクなどである。

対馬では南部対馬で採集されるが、個体数は比較的少ない。

○クロシジミ (R) チョウ目 シジミチョウ科

年1回の発生で成虫は7～8月に出現する。本種の幼虫は初めはアリマキの分泌する甘露をなめて生活するが、3令になるとクロオオアリが幼虫をくわえて巢中に運び込み、以後幼虫はクロオオアリより給餌を受けて成長する。母蝶は産卵にあたり、アブラムシとクロオオアリの存在が必要で、特に植物は選ばない。本種の生息地は雑木林や草地であるが、その発生地が開発のため状況が変わり消滅した産地が多い。

対馬では有明山や目保呂などで記録されたが、近年生息は知られていない。本州、四国、九州に分布し、長崎県本土にも産地は知られていたが、現在は消滅したものと思われる。

○ツシマウラボシシジミ (R) チョウ目 シジミチョウ科

対馬特産種。対馬以外では台湾、マレー半島、アッサムにとび離れて分布している。多化性。成虫は5～10月に出現し、森林内の陰地を飛翔する。幼虫の食草はマメ科のヌスビトハギ、フジカンゾウなど。越冬態は終令幼虫、翌年そのまま摂食することなく蛹化、羽化する。日本固有亜種。

ツシマウラボシシジミの生息地はスギの森林である。環境の変化が大きく、伐採によりその生息地を追われ、消滅したところもあるが、また新しい生息地を求めて分布を広げているところもある。

○クロツバメシジミ (R) チョウ目 シジミチョウ科

本州、四国、九州に分布。全国的には局地的な分布を示す。多化性。成虫は5～11月に出現する。幼虫の食草は各種のベンケイソウ科植物、幼虫は食草の葉肉内や茎部に潜入する。越冬態は幼虫。

対馬は全国的にクロツバメシジミの多産地であるが、道路の改修、山地の開発、石垣の撤去、古い家屋の改築などで、近年著しく産地、個体数は減少

している。

○キンオニクワガタ (R) コウチュウ目

わが国では対馬に固有の種で、朽木中に生息していることから、その生息地として自然性の高い森林が必然的に要求される。

比較的少ない種と思われていたが、原生林などで特殊な採集法によりかなりの個体数が得られている。

〔参考文献〕 環境庁 (1991) 日本の絶滅のおそれのある野生動物

—無脊椎動物編—

むしめがねNo.15 『竜良山のクロツバメシジミ』

厳原町の竜良山山頂の岩場において、クロツバメシジミを採集したので対馬における最も標高の高い産地の一つとして記録しておく。

この岩場にはベンケイソウ科の「チャボツメレンゲ」が自生しているので、これを食草にしているのは間違いないと思われる。竜良山の周囲は、原生林が残されており、わずか1 aにも満たないような山頂の岩場にどのようにして本種がたどりつけたのか不思議な気がする。

・クロツバメシジミ 1 ex. 採集 1 ex. 目撃 境 良朗

厳原町竜良山山頂 (標高558 m)

最後に、食草について御教示いただいた園分会長に感謝したい。

(境 良朗)

対馬の植物

～分布の境界線に見られる特異な植生～

こくぶ ひでとし
國分英俊

対馬の植物は、古くから多くの研究者によって全島くまなく採集が試みられ、分類、地史的なものも含めての論文も多く発表されている。このように多くの研究者が対馬の植物に注目したのは、大陸と日本との中間にあるという地理的位置に興味をもったことであろうが、日本の他地域に比べ大陸系の植物を多く産するということであろう。

対馬は全面積の約88%は山林であり、平地は少なく、山は険しい。海岸の浸蝕された断崖からは220～300 m級の山鹿そそり立ち、その斜面に海岸林が発達している。また、島内に数か所ある原始林を除いて、焼き畑農業（現在は行われていない）あるいは燃料林としての木炭、薪の生産のために、数回あるいはそれ以上代償植生である二次林が発達している。

対馬にわずかに残された原始林の植生をみるかぎり、対馬のもとの植生は、スダジイ、イスノキ、タブノキ、カゴノキを主な構成樹林とする九州本島とほとんど変わらない暖帯林だったようである。しかし、九州本島の植生と対馬の植生が大きく異なっている点は、対馬を分布の東限とする大陸系の植物が日本系の植物と混生する割合が大きいことであろう。島内では数か所、大陸系の植物と日本系の植物が混生した場所があり、天然記念物として国の指定を受けているところもある。また、日本に分布の拠点をおく植物が対馬まで分布し、大陸には分布しないものがあること、南日本系、南方系の植物の中には対馬を分布の北限とするものがあるなど、植物の分布で、大陸と日本、対馬暖流と南日本、南方系の植物の関係というように、興味あるテーマにこ

と欠かない島でもある。

対馬の植物相

対馬には木本類約300種、草本類約800種、シダ類約130種の計1200余種の植物が自生している。この中で大陸系の植物は、フシノハアワブキ、チョウセンヤマツツジ、アベマキ、チョウセンキハギ、フギレアズキナシ、ノゲルミ、コバノチョウセンエノキ、ヒトツバタゴ、コロミノサワフタギ、ゲンカイツツジ、カワムラサキツツジ、イワシデ、カラタチ、チョウセンニワフジ、ウラジロカンコノキ、ツシマヒョウタンボク、コウライヤナギ、ハイビャクシン、ヒロハコンコロカ、モクゲンジの木本20種、カラノアザミ、キバナハタザオ、チョウセンノギク、ダンギク、ダルマガク、ヒゴタイ、コウライトモエソウ、ハナナズナ、マツバニンジン、ケタガネソウ、クルマバアカネ、チョウセンイヌゴマ、ツシマママコナ、アレチアザミ、チョウセンカラスウリ、ウスギワニグチソウ、ツシマギボウシ、シロホンモンジスゲ、オオタニガワスゲ、ツシマノダケの草本20種の、計40種を産することが分かっている。この植物の中には、対馬にあって日本本土にないものも10種あり、対馬の植物相の特異さをものがたっている。

日本本土に分布の拠点をなく日本特産の植物のうち、対馬まで分布し（西限）大陸には分布しないものに、モミ、ヒメコマツ、ソヨゴ、ミヤマシキミ、コハウチワカエデ、カクレミノ、コバノミツバツツジ、カナクギノキ、ナガバノコウヤボウキの9種がある。以上あげた大陸系の植物と日本系の植物が混生している場所は対馬には数か所あるが、とくに美津島町の洲藻白岳原始林は日鮮混交林として大陸系の植物が混じる割合が大きく、大正12年に国の天然記念物に指定されている。

南日本、南方系の植物のうち、対馬を分布の北限とするものには、ヤクシマネツタイラン、アキザキナギラン、ツシマランなどがあげられる。このうちのツシマランは昭和51年に発見されたもので、今のところ日本での分布は対馬のみであり、発見された個体数も多くなく、まだ詳しい生態などはよく分かっていない。アキザキナギランについては自生していた数も少なかったと思われるが、乱獲のため絶滅状態にあることは残念でならない。

以下、対馬の植物相の一般的特徴と、大陸系の植物、日本系の植物が混生する場所を中心にして、原始林を紹介していこうと思う。

海岸に見られる植生

対馬は四方を海に囲まれて、海蝕崖がいたるところに発達しており、東側海岸、西側海岸で若干の差はあるが海拔20~30m以上で、ハマビワ、マルバグミ、ヤブツバキ、マサキを中心とした植生が見られる。林床は薄暗く、オニヤブソテツ、ノシラン、ツワブキなどの陰地性の植物が見られる。海岸に近い林縁では、ハチジョウススキ、ダルマガク、テリハノイバラ、ハマナデシコ、ホソバワダン、シャリンバイ、キジカクシなどが生えている。ハイビャクシンの群落を、上対馬町、豊玉町、美津島町の一部で見ることができる。

対馬は海岸に砂浜は少なく、ほとんどがゴロ石の浜である。ここで見られる植生は九州本島とほとんどかわることはなく、ハナゴウ、テリハノイバラ、ハチジョウススキ、ハマエンドウ、ハマウドなどが主な植物である。以前はクロマツ林が見られたが、最近の松枯れで多くが姿を消し、景観美が失われつつある。西海岸では東海岸にくらべカシワの自生が多い。

二次林

対馬には、わずかに残る原始林をのぞき、伐採した後にできた二次萌芽林が多い。この二次萌芽林を構成する樹木は、豊玉町付近を境にして北部と南部では大きく違っている。南部はスダジイを中心とした常緑広葉樹であるが、北部ではスダジイの混じる割合が極端に減り、主にコナラ、ノグルミ、アカメガシワ、リョウブ、コバノガマズミを中心とする落葉広葉樹林になる。この原因についてはよく分からない。対馬を訪ねた人は、車で島を縦断するとき、南部と北部の植生の違いに驚くことだろう。

原始林の一般的な特徴

対馬の原始林は、南の方から竜良山、神崎半島、有明山、白岳、大星山、御岳に残っているだけである。原始林を構成する主な樹木は、スダジイ、イスノキ、タブ、カゴノキであり、オガタマノキ、カクレミノ、ヤブツバキ、ユズリハなどの常緑広葉樹、ムベ、フウトウカズラ、テイカカズラなどのつる植物、林床にはアリドウシ、マンリョウ、トチバニンジン、キエビネ、ナツエビネ、シュンラン、ヤブラン、オモト、ムサシアブミなどの草本類が生えている。原始林の上部ではアカガシ林が発達し、イスノキ、ヒサカキ、リョウブが混じり、林床はミヤマシキミの群落が見られる。対馬の北部ではモミの混入が多くなる。

竜良山原始林

厳原町の南部にあり、大正十二年に国の天然記念物に指定されている。対馬を代表する原始林である。この原始林は、典型的な暖帯林であり、昔の対馬の植生をそのままにとどめている。林床には、対馬の他の地域では見るこ

とのできない、ヒメトケンラン、ヤクシマネッタイラン、ガンゼキラン、ミヤマトベラなどのめずらしい植物が自生している。また、樹上には、ムギラン、マメズタラン、セッコク、フウラン、ナゴラン、クモラン、カシノキランなどの着生ランを見ることもできる。頂上付近の岩場では、チョウセンヤマツツジの自生もある。なお、ヤクシマネッタイランの分布は竜良山が日本の北限となる。

竜良山原始林は、県内の原始林のなかでも規模が大きく、貴重な原始林の1つであり、四季を通じて精査すれば、未記録の植物も発見できるのではないかと思う。

最近の野草ブームはこの原始林までおよび、貴重な植物が次々に姿を消しつつあることは憂慮にたえない。

洲藻白岳原始林

白岳は上部が石英斑岩からなる美しい山である。日鮮混交林としても有名であり、原始林の上部は多くの大陸系の植物が自生している。チョウセンヤマツツジの主産地も上部の岩場であり、5月上旬の開花期は岩場がこの花にかざられる。

ここでは大陸系の植物であるチョウセンヤマツツジ、カワムラサキツツジ、ゲンカイツツジ、アベマキ、フシノハアワブキ、イワシデ、ニグルミ、コバノチョウセンエノキ、ツシマママコナ、日本系植物のモミ、ヒメコマツ、コハウチワカエデ、ソヨゴ、ナツツバキ、ミヤマシキミ、イモノキ、カナクギノキ、カクレミノ、コバノミツバツツジ、ツシママンネングサが混生している。対馬の固有種であるシマトウヒレンの原産地でもある。原始林内は着生ランも多く、ベニカヤラン、セッコク、カヤラン、ムギラン、マメズタラン、

クモラン、フウラン、ヨウラクランなども自生している。

御岳原始林

御岳は標高490mの、対馬北部では一番高い山である。この原始林は他の原始林と比べるとモミの混じる割合が大きく、大木になっているものも多い。アカガシ、アラカシ、スダジイ、カゴノキなどの常緑広葉樹が主木で、これにコハウチワカエデ、イタヤカエデ、ユクノキなどの落葉広葉樹が混じる。林床にはナンザンスミレ、ウスバサイシン、ベニシユスランなどが生え、樹上にはセッコク、カヤラン、ベニカヤラン、ヨウラクランなどのラン科植物、ノキシノブ、カタヒバ、シノブなどのシダ植物が着生する。

分布上興味のある種

チョウセンヤマツツジ (ツツジ科)

とくに白岳の自生地が有名であるが、最近の調査で、厳原町の立亀岩、竜良山山頂、仁田川流域でも発見され、とびとびではあるが全島に分布していることが分かっている。半落葉性で低く横に広がっていく性質をもっている。4月中旬から5月上旬にかけて直径5～6cmの淡紅紫色の花をつける。白岳頂上のもとの、仁田川流域ものもとは花型、開化期に若干の差がある。最近乱獲のはげしい植物の1つである。

ゲンカイツツジ (ツツジ科)

本種は岡山県以西、九州北部、対馬、朝鮮半島、中国まで分布する。対馬では北部にいくほど多く、南部ほど少なくなる。3月中旬からコナラ林など落葉広葉樹林内、山林の露出した岩、浅海湾内の波打ち際まで群落をつくり、対馬の初春はゲンカイツツジの桃紫色の花にかざられる。花の色は変異も多

く、まれに白色も見られる。

ウラジロカンコノキ (トウダイグサ科)

対馬の南端豆殿の一部に自生地がある。対馬のカンコノキの自生は多いが、ウラジロカンコノキは岡部虎男氏によりかなり調べられたが、豆殿以外では発見されていない。カンコノキは無毛であるのに対し、ウラジロカンコノキは葉の裏と若い枝に毛があることで区別できる。発葉もたいへんおそく5月になる。長崎県内では、外山三郎氏が、五島、島原半島で発見している。

モクゲンジ (ムクロジ科)

外山三郎氏が昭和48年に、豊玉町妙見の元島神社で野生のものを発見したのが対馬での初記録であり、最近、島内数か所でも発見されている。落葉高木で、中国、朝鮮半島から日本まで分布する大陸系の植物であり、7月に黄色の花をつける。別名センダンバボダイジュとよばれ、神社や庭園に植えられる。

ダンギク (クマツツラ科)

ダンギクは台湾、中国、朝鮮半島、日本では対馬、壱岐、五島、平戸、長崎を中心とする九州西北部に分布するが、とくに対馬に多く、国道ぞいの崖地や、山の露出した岩の上に群生しているのを見ることができる。紫色の段上に咲く花は美しく、対馬の名花である。

オオチダケサシ (ユキノシタ科)

オオチダケサシは、ヒマラヤ、中国、朝鮮半島、アムール、ウスリーから対馬まで分布する大陸系の植物である。対馬での自生地は限られ、上県町の一部、竜良山の上部のみである。上県町の自生地では、川岸の露出した岩の上に生えており、川が増水するとかぶるようなところである。7月下旬から8月上旬にかけ淡紫紅色の花をつける。

オウゴンオニユリ (ユリ科)

日本本土に生えるオニユリは、そのほとんどが3倍体であり種子ができない。対馬に自生するオニユリは約75%が2倍体のオニユリで、大部分が種子をつける。日本本土ではオニユリの変異を見ることはできないが、対馬では種子繁殖をしており変異も見られる。その代表がオウゴンオニユリであろう。オウゴンオニユリは黄色のオニユリで、花つき繁殖とも大変よい。

ツシマラン (ラン科)

ツシマランは昭和51年に厳原町で発見されたもので、現在、日本での分布は対馬の発見地のみである。落葉体をもっておらず、全体が赤褐色の腐生ランであり、10月上旬に3~10個の特徴のある花をつける。世界での分布は、ベトナム、タイ、中国である。毎年地表に姿をあらわさないために、詳しい生態は分かっていない。

おわりに

対馬は日本と大陸の中間に位置し、植物のみならず生物全般にわたって、その分布に興味のある島である。これまでに多くの研究者によって生物相があきらかにされてきたが、まだ調査研究の余地は十分ある。それだけに今後の課題も大きく楽しみである。

(今里中学校)

対馬の鳥

たにくちひでき
谷口秀樹

毎年ゴールデンウィークの頃になると、上県町佐護の平野には300人ほどの人たちが訪れます。この現象は、10年ほど前から起きるようになったものです。この人たちの出で立ちみんな一様に似ています。普通首から双眼鏡を下げ、肩には三脚につけた望遠鏡をかついでいます。そして、人が普段は入り込まないような所を歩いたり、車を入り込ませたりしています。時には、そこらの中の人々が1か所に集まって、1点をじっと見つめていることもあります。

一体この人たちは、どこから、何をしに佐護に来ているのでしょうか。

この人たちの乗っている車のナンバーを見ていると、様々な地域から来ていることが分かります。福岡ナンバーが多いのですが、遠くは練馬、山形ナンバーも見えます。そして、この人たちの見ている方向には決まって小さな生き物（時には大きな場合もありますが）、鳥がいます。この人たちの目当ては鳥だったのです。

でも鳥なんてどこにでもいる生き物です。なぜわざわざ対馬までやってくるのでしょうか。それは、この人たちが来るようになった十数年前に答えがあります。

十数年前のことです。日本野鳥の会の発行する機関紙「野鳥」に、対馬の鳥を紹介する記事が載っていました。その記事の中には、今までに日本ではあまり見ることはできなかったシマノジコのような鳥や、日本で初めての記録になるマダラチュウヒが書かれていたのです。この記事を読んだ人たちが

どっと対馬を訪れるようになったという訳なのです。その数は年を追うごとに増え続け、対馬は日本中に知れ渡るバードウォッチングのメッカになったのです。

ところで上県町佐護にだけバードウォッチャーが集まるのも訳があります。それは、季節と対馬の南北に長い地形が関係しています。鳥は、季節によってすむ地域を変えるものがあります。それを「渡り鳥」と呼んでいます。そして渡り鳥は、南北に移動することが多いのです。それは、寒さによる餌の増減に合わせて起きていると言われていています。すなわち、冬季の餌の減少により、鳥は、暖かくて餌の豊富な南方をめざし、夏季、温度の上昇による餌の増加により、競争相手の少ない北方をめざすのです。

渡りは地形によりそのコースが限定されてきます。山岳や海は避けて飛ぶと言われていています。しかし、日本のように四方を海で囲まれた国では、どうしても海を渡らなければなりません。そこで、半島や島が渡りの中継基地になるということです。対馬の場合は、朝鮮半島と九州の間に位置しているので、ちょうど休息地として便利です。そこで、春北上する渡り鳥は、南部に到着すると次第に上島に渡り、ちょうど韓国と相對する、上県町佐護に集中することになります。佐護は水田地帯ですので、平地に生息する鳥たちの貴重な休息地ともなります。

秋の渡りは、春ほど顕著に現れず、バードウォッチャーもほとんど見られません。私の見た限りでも、あまり特筆するものは見られません。秋は南下するわけですから、下島に多く見られるかと思って南部の地域も調査したことがあります。やはりあまり見られませんでした。対馬が、より朝鮮半島に近いからではないかと思われれます。つまり、南下するときには休息する間もなく一気に九州方面に渡って行っているものと思われれます。

そんなことから、秋は春の時のようなバードウォッチャーの訪れはありませんが、春には見られない味わいもあります。

その1つが、アカハラダカの渡りです。アカハラダカは中国東北部や朝鮮半島で繁殖する小型の鷹です。この鷹は、数年前まで日本ではごく前に観察されるだけの珍しい種類といわれていました。ところが、数年前の秋に琉球列島を南下する群が観察され、その後、次々に各地で報告されるようになってきました。1986年の9月12日から13日にかけて男女群島女島で1200羽の群が観察されました。ところが翌14日、五家原岳において13000羽の群が観察されて、長崎県内のアカハラダカの渡りが解明されてきました。翌年には、県北でも数千羽の渡りの群が観察され、さらに北にある対馬での渡りが期待されていました。そして、ついに巖原町にある内山峠においてアカハラダカの800羽の群が観察されたのです。

当日観察された國分先生の話では、霧の中から次々に現れて壮観だったそうです。その後、10000羽を越える群れも観察され、対馬もアカハラダカの主要な渡りルートになっていることが明らかにされました。

バードウォッチングをしてくると、それぞれ好きな鳥が決まってきますが、鷹が好きな人が多いようです。特に鷹類の渡りを観察すると、その姿に圧倒され、次第にその時期になると落ち着かなくなる人が多いようです。その人達は鷹熱にかかってしまったのです。実は、私もその一人ですが、9月下旬になると私の内山通いが始まります。普通は早起きが苦手な私も、この時ばかりは、夜明け前には現地にいるという技を使います。

鷹の渡りで最近明らかにありつつあることがあります。

ハチクマという鷹は最近西に渡っていくということが明らかにされました。本州を西に向かうルートが広島県の研究者によって解明され、その後福岡県

北部、佐賀県北部を経て、長崎県北部にいたり、平戸島から南西に向かい、五島列島福江島を最後に西に飛び去ることが観察されました。それまでは、この鳥の飛び去る方向として3つのコースが予想されていました。1つは、サシバやアカハラダカ同様、琉球列島を経て南下するコース。1つは五島列島から西へ渡るコース。そしてもう1つが対馬から朝鮮半島へ渡るコースです。その内の西へ向かうコースが証明されたわけですが、残り2つの内の琉球列島コースはあまり渡っていないことが以前から指摘されていました。対馬ルートについては長いこと不明にされていましたが、4年前の春、200羽のハチクマの群が上対馬町小鹿の上空で観察されました。ところで、このルートのおもしろいところは、春の北上ルートとは違って南下しているのです。このことは朝鮮半島からの渡りを証明していると思います。この群は、その後2時間遅れて厳原町の内山上空を南下する群として、当時、内山分校に勤務されていた國分先生にて確認されています。この観察から次に秋の渡りが期待されました。当然、春と反対に北上することが予想されました。同年、10月にやはり北上する群が佐護にて観察されました。夕方茜色に染まった空の中を韓国釜山の方に向け飛び去る姿は、不思議な感動を与えてくれました。

対馬の魅力は、別に春秋の渡りの時期ばかりとは限りません。夏や冬にもほかの地域にはない味わいがあります。

夏、各地の山麓を歩いているとかわいいさえずりを耳にすることがあります。これは、この季節、日本のはかの地域ではまず聞くことのできないさえずりです、この声の持ち主はミヤマホオジロという雀くらいの小鳥です。この鳥は、冬鳥として主に西日本に渡ってくる鳥です。ところが、20数年前に対馬で繁殖していることが、当時、佐護中学校教諭の鴨川先生により確認されました。その後、対馬全島にかなり広い範囲で生息していることを確認し

ています。

ミヤマホオジロほどではありませんが、主に対馬北部に夏季生息している鳥としてシロハラを挙げることができます。この鳥も西日本に冬鳥として渡ってくる鳥ですが、やはり20年前に鴨川先生により繁殖が確認されています。両種とも日本での繁殖例は現在までのところ対馬だけです。また両種ともに、朝鮮半島では普通に繁殖している鳥とされているので、ツシマヤマネコ同様、かつては大陸と対馬がつながっていたことを物語る貴重な種類といえそうです。

朝鮮半島とのつながりを物語る種類として忘れることのできない鳥はキタタキです。1920年を最後に記録の途絶えた鳥ですが、その後、ときどき生息情報が寄せられており、数年前には巖原町の内院でもありました。朝鮮半島ではまだ生息が確認されていますし、近縁のクマゲラはかなりの数生息生息しているようですので、秋の渡りの時期には渡来しているものもいるかもしれません。実際クマゲラは北海道からの渡りと思われるものが東北地方で監察されることがあるそうです。枯れ木に止まる両種との出会いを夢見ています。

対馬は寒いところだと知らされていましたが、4年前の寒さはすごいものでした。部屋の中のウイスキーの水割りが凍っていたときには、多良岳の冬山登山の思い出がよみがえってきました。あの時には零下10度という寒さでしたので、おそらくその温度だと思います。北海道に匹敵するような寒さに乗って、やはり北海道に匹敵する冬鳥がやってきます。代表的なものとしてはオジロワシがいます。かつてはねぐらに20数羽も見られたそうです。私は同時に7羽観察したことがあります。全島で数えると10数羽はいるものと思っています。成鳥の割合が高いので、越冬地として定着しているものと思

われます。同様にオオワシの飛来も見られますが、こちらの方は以前から飛来数は少なく、今後の飛来が心配されます。さらに興味深いのはイヌワシです。これも数羽飛来があったそうです。しかし、最近ではほとんど観察されなくなり、繁殖地での生息が心配されます。

対馬は、他の地域に比べて多くの鳥たちと、特徴的な種類が見られる豊かな自然があります。しかし、ここもご多分に漏れず、開発の嵐に見舞われています。上島はまだ自然が多く見られていましたが、ここ数年の開発は加速度的に進んでいます。特に林道は網の目のように入り込んでおり、森林伐採に拍車がかかっています。鳥たちにとっての未来は決して明るくありませんが、貴重な鳥たちがいつまでも私たちの目を楽しませてくれるよう祈ってやみません。

(佐護小学校)

むしめがねNo.16 『はじめまして・・・』

海が光る、緑がもえる、とは美津島町の観光スローガンですが、上陸してまさに実感したのは、山なみと静かな海の美しさでした。季節が移るにつれ、その色合いや風の流れも変化し、様々な生き物が息づく、すばらしきワンダーランド。赴任してわずか7か月ですが、私は対馬が大好きです。

夏の竜良山登山という、強烈なデビュー以後、アカハダダカ観鳥、白岳登山と、皆様の仲間に入れていただき、楽しく過ごしております。

自然や生き物について、あれも知りたい、これも知りたいと好奇心いっぱいです。どうぞよろしく願いたします。 (川副明子)

対馬の昆虫

さかい よしゆき
境 良朗

はじめに

一般の方に、対馬の昆虫について分かりやすく解説するにはどうすればよいのだろうか。

「対馬にはこんな珍しい昆虫がいますよ」というように、いくつか対馬を代表する虫たちを紹介すればいいのか、少々堅苦しくなっても、今までの研究をかみ砕いた形で生物地理学的に述べてみたほうがいいのか、随分と悩んでしまった。結果、その中間をとったような形になってしまい、中途半端な感じがしないでもないがお許し願いたい。

I 対馬というところ

対馬は朝鮮半島と九州本土のほぼ中間に位置する。地形の特徴は、隣の奄岐島と比較してもらえばよく分かるが男性的である。主として第三紀層からなる地壘山地で、ほとんどを標高平均300m程度の山々が連なっている。したがって大きな河川もなく、谷間に無数にのびる小河川群は梅雨時期を除いて安定した水の供給は望めない。

また、植生は沿岸部のハマビワ・オニヤブソテツ群落からスダジイ・ホソバカナワラビ・ヤブコウジ群集へと続き、海拔350m以上ではアカガシ・ミヤマシキミ群集が見られる。草原は僅かに千俵蒨山、有明山の一部に見られるだけである。なお、豆酸崎や久原などの海岸部及び内陸の一部にカシワ群落が見られるのは特異である。

このような地理的条件や植生から、対馬は古くから生物研究者の興味を引き、多くの研究成果が公表されている。その結果、対馬の昆虫相も複雑な様

相を呈していることが明らかになっているが、一言で対馬の昆虫相を定義づけるのはなかなか難しい。簡単に言えば、

『対馬には、大陸系と日本本土の種が混在すると共に、対馬暖流の影響を受けた、いわゆる南方系の種、さらに一部の寒冷地の種に加え、対馬島内で隔離され種分化をとげたと考えられる固有種（または固有亜種）が生息している』ということになるだろう。

II 対馬の昆虫相の類型化

前述のように、複雑な対馬の昆虫相を大陸－対馬－日本本土－さらに南方の（亜）熱帯地域という地理的に見たその種の分布状態から、いくつかの型に類型化することによって分かりやすく整理することができる。

- | | |
|------------|-------------|
| A 大陸－対馬タイプ | D 対馬－亜熱帯タイプ |
| B 対馬－本土タイプ | E 対馬－寒冷帯タイプ |
| C 大陸－本土タイプ | F 特産（亜）種 |

ただし、日本の昆虫類の研究は進んでいるとはいっても、まだまだ限られた分野のしかもマクロな種に限られていること、大陸とりわけ朝鮮半島の情報不足などがあることに気をつけなければならない。

このような手法を用いた研究論文として、日高（1976・蝶類）、白水（1980・昆虫全般）がまとまっているので、ここでも参考にしながら進めていきたい。

III A 大陸－対馬タイプ（大陸系種）

対馬の生物相を語るとき、一番ひき合いにだされるのがこの型である。対馬を代表する大型の哺乳類ツシマヤマネコのように、日本本土には分布せず、朝鮮半島や中国大陸に分布する種や亜種が対馬には数多く生息していることが確認されている。昆虫類では50種以上にのぼっている。

大陸—対馬に分布し、なぜ日本本土に分布しないのかということについては、それぞれの種で複雑な要因が絡んでくる問題なので、現在までわずかの種について推論が展開されているにすぎない。

簡単に言えば、これらの昆虫の多くは、かつて対馬が大陸と陸続きであった時代に、陸橋を渡って侵入したと考えられている。しかし、対馬と本土は海峡によって分断されていたため分布を広げることができず、その後、大陸と対馬の間にも海峡が成立し、島に隔離されたのであろう。

タイワンモンシロチョウ

ごく普通に見られるモンシロチョウと姿は非常によく似ている。モンシロチョウがキャベツ等、人の生活と深く関わりながら勢力を拡大していった比較的新しい種であるのに対して、本種はそれ以前に大陸から対馬に侵入してきたと考えられている。食草はハナナズナ、イヌガラシ、マメグンバイナズナ等、野生のアブラナ科植物である。全島に広く分布するが、主に海岸域や山間部の林道周辺の比較的明るい所を生活の場とし、内陸に入るほど、また山頂に向かうほど個体数は少なくなる。モンシロチョウと生態的な「すみわけ」が見られる。出現期は三月中旬から11月上旬。

写真で示したように、モンシロチョウとは、後翅の黒紋の有無で容易に区別できるので、是非観察していただきたい。

トラフヒトリ

蛾というと、顔をしかめられる人も多いかと思うが、色彩、紋様、形の多様性では蝶より蛾に軍配が上がると思う。種類も対馬で記録されているだけでも、蝶の80種程度に対し、蛾は2000種に及ぶ。夜間採集を行うと、条件さえよければ1日に100種以上も採集することができる。対馬でも蝶を対象に研究観察をされている方は2、3人いるが、蛾の方は残念ながら聞いたこと

がない。

本種は中型の非常に美しい蛾の一種である。春先、四月頃、せかせかと道路を横切っている、体長5cmほどのこげ茶色をした毛虫をご覧になった方はおられないだろうか。これが、トラフヒトリの幼虫であると考えられている。以前に卵から飼育した経験では、幼虫段階までは比較的容易に育つが、蛹に至る手前で死亡してしまうのである。地中の浅いところで蛹になると予想しているが、この春先の幼虫の奇妙な行動と共にまだ謎である。

食草はバラ科のウメ、イタドリが記録されている。5月頃より出現するが、第1化の個体は昼間でも飛翔する性質が強い。

ツシマカブリモドキ

大きくとらえれば、マイマイカブリの仲間と考えてよいだろう。マイマイはカタツムリのこと、モドキは「似て非なるもの」の意。陸性の貝類を食べていると思われる。胸部の赤銅色と上翅を縁どる緑黄色が美しい。主な生活圏は人家周辺の低地から低山地にかけてで、標高が上がるほど個体数を減ずる傾向にある。

当初、大陸に分布する種と同一種として扱われていたが、最近の研究では独立種になった。しかし、非常に近縁のヤンコウスキーカブリモドキが朝鮮半島に分布することから、この型の中に入れた。

採集してみたいと思われるなら、近くの山にちょっと入り、プラスチックのコップにカルピスを少量入れたものを地面に埋めておくと、簡単に捕らえられる。なお、本土に普通のマイマイカブリは対馬には産しない。

キンオニクワガタ

子供達に一番人気のあるクワガタムシであるが、対馬には12種が産する。中でも一般的なのは、(ツシマ)ヒラタクワガタ、ノコギリクワガタ、コク

ワガタの3種であろう。最近、デパートなどで?万円もするオオクワガタが売りに出され話題になっているが、残念ながらオオクワガタは、対馬では記録はあるものの採集された個体数は非常に少ない。

本種は比較的最近になって白岳において発見された種で、当初は原生林を中心とした山地性の種ではないかと考えていたが、海岸付近の人家の灯火にも飛来することが明らかになり（志多賀や仁位で確認）、広い垂直分布を示している。

名前から体色は金色をしていると思われがちだがそうではなく、全体としては黒っぽい。体長は♂で40mm内外。大顎の形に特徴がある。大陸では朝鮮半島、濟州島などに生息する。

ハラアカコブカミキリ（ベニフカミキリ）

対馬では、しいたけの「ほだ木」を食い荒らす害虫として有名である。翅の上部に、細い毛を何本も束ねたような突起物が二本みられるのが特徴で、腹部は赤と黒のだんだら模様をしている。特に春先に多く、ほだ木上で何組も交尾しているのが観察される。かつて、大分県でも発見されたことがあったが、これは対馬からのしいたけの原木によって移入されたと考えられている。

アキマドボタル

写真がないのが残念だが、アキマドボタルの雌の成体はちょっと気持ちの悪い姿をしている。表現は悪いが、大きなウジ虫といったらよいだろうか。。幼虫時代、ゲンジボタルは清流に住むカワニナなどの貝類を食べるため水中生活をしているが、アキマドボタルは陸上で生活する。ウスカワマイマイ（かたつむりの1種）を食べているからである。また、成虫になる時期は、他の多くのホタルが初夏から真夏にかけてなのに対して、本種は9月に入っ

て涼しくなってから姿を現す。

しかし、最大の特徴は何といっても大きさと雌の形態である。特に雌は体長が3 cm以上もあり、しかも羽が退化していて飛ぶことができない。発生数も雄に比べ極端に少なく、大きな卵をたくさん産むことと引き替えにしたのではないかと考えられている。草むらで光とフェロモン（誘引物質）を放ちながら、じっと雄を待ち続ける。

1990年の調査では、全島に広く生息していることが確認された。対馬の秋を告げる風物誌アキマドボタルがい飛び交う、対馬がいつまでもそんな自然豊かな島であってほしいものである。

ツシマキボシカメムシ

さわると異臭を放つカメムシの仲間、ツシマオオカメムシ、チョウセンオオカメムシと共に、対馬を代表する「三大カメムシ」の一種。

この3種は、いずれも大変珍しく、出会えれば運がよいということになる。ただ、ツシマオオカメムシについては過去（高校時代）に一度だけ、友人の国分三生氏が厳原町の金刃比羅山のスタジイの樹において、100数十頭におよぶ個体を採集されたことがある。このことは、集団越冬の可能性を示唆するものとして興味深い。

本種においては、筆者も過去2頭しか観察の機会に恵まれていない。20年ほど前、厳原町有明山で発見されて以来、採集されたものは10数頭程度であろう。

チョウセンケナガニイニイ

対馬に何種類のセミが分布しているかご存じだろうか。何人かの人に尋ねたところ、ミンミンゼミ、アブラゼミ、ツクツクホウシと、この辺までは何とか答えが返ってきた。身近に鳴き声を耳にしているはずなのだが、名前と

なると意外に分らない方が多いようだ。

対馬にはこの他にもクマゼミ、ニイニイゼミ、チョウセンケナガニイニイの合わせて6種のセミが生息している。島内では種類によって、ほぼ鳴き初める順が決まっているようである。まず、6月下旬にニイニイゼミが鳴き初め、7月に入りツクツクホウシ、クマゼミ、アブラゼミと続き、最後にミンミンゼミとなる。一番遅く、年によっては10月上旬頃まで鳴いているのはツクツクホウシで、発生の期間が長い。いずれにしても、セミは夏の虫というイメージがあり、暑い盛りのセミの声はそれなりに風情がある。

ところが、ここで紹介するチョウセンケナガニイニイは秋に出現する珍しい種である。コオロギやスズムシなどが今を盛りと鳴き競う10月下旬から11月中旬にかけて、対馬各地で鳴き声が聞かれる。ただ、どこにでも生息しているわけではなく、分布は局地的である。昔は、おそらく全島に広く生息していたと考えられるが、生息環境の悪化に伴い、しだいに生息域が狭められたのだろう。ニイニイゼミ（対馬では盆ぜみともいう）より一回り大きく、名前のように体中が細い毛で覆われている。

鳴き声を確実に聞くことのできる所として、峰町の新佐賀トンネルの周辺をあげておく。鳴き声はニイニイゼミと比較してややかん高く、チーッ、チーッ、チーッと鳴き、その後はニイニイゼミのようにチッチッチッという断続音を発することはあまりない。

通常、コナラなどの樹冠付近の小枝で鳴いていることが多く、姿を観察することは非常に困難である。筆者もここ数年、声はすれども姿は見えずの状態が続いている。したがって、生態等不明な点が多く、研究の興味をそそられる対象ではある。

IV B 対馬一本土タイプ（日本系種）

日本本土と対馬に分布し、朝鮮半島や中国大陸には現在まで記録のない種である。代表的な種として次の2種をあげておく。

ゲンジボタル

5月下旬頃より、対馬各地の清流河川に発生が見られる。昔からの初夏の風物誌「ほたる狩り」は、このホタルを対象にしたものであろう。厳原町白子地区で、「ほたる祭り」が毎年行われているのはご存じのとおりである。

幼虫は水中で生活し、カワニナなどの貝類を食べて成長する。したがって、生活排水、農業などで河川が汚染されたり、護岸工事で川岸がコンクリートで固められたりすると、貝類が死滅したり、産卵や蛹化をする場所がなくなり、姿を消してしまうことになる。ゲンジボタルの発生が、自然環境の保全の指標となっている。

数匹が光り始めると次第に周りに広がり、集団で発光する傾向がある。聞いた話によると、豆酏地区では決まった一本の樹に郡集し、樹全体が光り輝いて見えるというが、是非確かめたみたいものである。

クマゼミ

夏休みが来ると、古い蚊帳で作ってもらった捕虫網を片手にセミ採りに興じたものだ。中でも、クマゼミは透明な羽、黒光りした逞しい体と腹部のオレンジのコントラスト、採集の困難さから、子供達にとってあこがれのセミであった。鳴き声からクマゼミとは呼ばず、「ワシワシ」と言っていた。

全島に広く分布しているが、年によって、また地域によって発生数にかなりの差があるようで、特に豆酏では密度が高い。朝鮮半島には別種のチョウセンクマゼミが分布している。

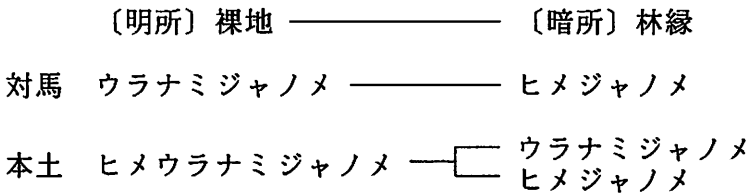
V C 大陸—本土タイプ (欠落種)

一般的に、島は面積も狭く、多様な生物が生息するために必要な生態的条件が整っていないために、近隣地域に広く分布する種が欠落していることが多い。対馬においてもそのような昆虫がいくつか見られる。

ヒメウラナミジャノメの欠落

本種は日本本土、朝鮮半島にごく普通に見られ、個体数も多い。壱岐島にも分布している。しかも、対馬において本種の生息を制限する要因が何等見当たらない。対馬に分布しないのは非常に不可解である。

ここで少し気になるのが、本種と近縁のウラナミジャノメの存在である。分かりやすいように、整理してみよう。



少々荒っぽいですが、生息環境によって大まかにとらえると右図のようになる。本土の様子は実際に観察したことがないので、以前故江島氏に長崎の様子を伺ったことを参考にした。さらに、対馬のウラナミは大陸系の種で、日本本土亜種とは区別される。

対馬のウラナミが明所から林縁まで好むのに対して、本土のウラナミはどちらかといえば林縁部を中心に暗所を好む傾向にあるということである。亜種間で生態的な違いがあるといえる。つまり、本土においてヒメウラナミが生息する環境に、対馬ではウラナミが進出していることになる。このようなことから、かつてヒメウラナミジャノメが対馬に生息していた時代があったにせよ、ウラナミジャノメと生態的に競合関係にあったことは想像に難くな

い。これ以上の仮説は荷が重いので止めておくが、どなたかすっきりとした推論を立てていただけないだろうか。

VI **D** 対馬—亜熱帯タイプ (南方系種)

対馬には亜熱帯性の昆虫も多く見られる。対馬が今よりもっと温暖であった頃に分布していたものが、そのまま環境に適応し残ったと思われるものと、黒潮—対馬暖流の影響を受けながら分布を広げてきたものに分けることができる。前者の遺存種の代表として、あまりにも有名なツシマウラボシジミを紹介したい。

ツシマウラボシジミ

本種を対馬だけに生息する特産種だと誤解されている方も多と思われるがそうではなく、原産地はインドのアッサム地方である。その他、台湾の北部山地にも分布することが知られている。

発見当時、このような熱帯性の蝶が、日本のしかも対馬のような島嶼に生息していたことはにわかに信じ難く、大きな話題となった。発見者は当時長崎大学生であった浦田明夫、池内一三氏らである。学名を、

Pithecopa fulgens tsushmanus SHIROZU et URATA

といい、亜種名に「つしま」、命名者に発見者の一人である浦田氏の名前が冠されている。昆虫を研究する者にとって新種を発見することは夢であり、最高のロマンなのだが、新種でなかったにしろ、日本未記録種の発見は胸が躍るものである。

ツシマウラボシジミは対馬北部を中心に分布し、南に下がるほど局地的になり、南限は豊玉町和板及び和多都美神社のライン上である。主な生息環境は杉林の林内で、付近に沢か溪流が形成され、適当な日照が保障されなければならない。次第に分布域を広げていると考えられるが、その原動力は飛

翔力にあると思われる。通常は、杉林の下草の上を弱々しく飛翔しているので、移動性は小さいという印象を受ける。しかし、このように飛翔していた個体が突然十数m上空に直線的に舞い上がり、杉の樹冠を飛び越えて姿を消したのを過去に数回目撃したことがあるので、思っている以上に飛翔力はあると考えている。

熱帯性のこの蝶が、どのようにして対馬に生き残ることができたのか、一番興味を持たれるところであり、その答えを越冬前の幼虫の造巢性などに求めた見解もあるが、正直なところよく分かっていない。

VII E 対馬—寒冷帯タイプ (寒地性種)

対馬にはツシマウラボシシジミやタイワンオオテントウダマシのような(亜)熱帯性の昆虫が生息する一方で、本州の高山帯、東北地方、北海道等の寒冷地を分布域にもつ種が生息する。

対馬の緯度は、ほぼ本州の広島—大阪—東京都の大島のラインにあたる。しかし、対馬の夏季の平均気温はこれらの地域に比べ低く、この冷涼な気象条件が寒冷地性の昆虫の分布を可能にしている要因の一つであることは間違いないと思われる。

VIII F 特産(亜)種

世界でも対馬だけに産する種(亜種)である。日本の島の中でも、対馬は特に多くの特産(亜)種が知られ、和名に「ツシマ」を冠しているものも多い。

ツシマクロモンシャチホコ、ツシマデオキノコムシ、ツシマアカスジヒメテントウ、ツシママメコメツキ、ツシマヒサゴゴミムシダマシ、ツシマヒメカミキリ、ツシマカマキリモドキ、ツシマトゲフキバツタ等々、30種以上。

特産亜種として、

アゲハモドキ、フサオシャチホコ、ヒメオサムシ、ミズギワコメツキ、ビロウドカミキリ、コマルハナバチ等があげられる。ただし、亜種については研究者によって見解の違いがあったり、軽微な形態の違いや被検標本も十分でないままに命名する安易な処理の仕方もあり問題がある。

ツシマキモンチラシ

中学生の頃から虫に興味を持ち、主に蝶類を対象に観察を続けてきたが、今まで述べてきたように対馬の昆虫はいろいろな分野で大変おもしろく、現在までトンボ類、蛾類、甲虫類と何にでも手を染めてしまった。

本種もそういった片手間に採集されたものである。1978年6月、ミスジチョウという蝶の調査に豊玉町和板に出かけた。ちょうどクリの花が満開で、テングチョウやヒョウモンチョウ、各種甲虫類が吸蜜に訪れていたが、その中にオキナワルリチラシに似た大型の昼間飛翔性の蛾を見つけた。よく見ると、クリの木の上空を同じ蛾がたくさん飛んでいる。一頭採集し、正体を確認したので安心して、名前を調べることもなく、後日標本箱の片隅に入れておいた。

それから2年後、蛾の研究をしておられる岸田泰則氏が来島され、この蛾が日本未記録のタイワンルリチラシであることを指摘いただいた。それほど珍しい蛾であったとは知らず、勉強不足を恥じると共に研究材料のためもう少し採集しておけばよかったと悔やんだものである。

さらに、最近の研究によると、タイワンルリチラシとは近縁の新種として記載され、和名もツシマキモンチラシと変更された。一九七八年以後、このときほど多くの個体を観察する機会もなく、二頭の追加個体を得ただけである。今では、遠くは東京あたりから本種を採集するために研究者が訪れるほどの稀種になってしまった。

おわりに

思いつくままに対馬の昆虫について述べてきたが、対馬の昆虫の多様性とおもしろ味を少しでも出せたかどうか不安である。

昆虫は非常に種類も多く、分布調査一つをとってもなかなか進んでいないのが現状である。調査が一番進んでいる蝶類においても、生態的なことは十分調べられていない。植物であれ昆虫であれ、自然を相手にした調査や研究に終わりはないようである。

自然の親しみ方はいろいろある。最近では、だれでも手軽に写真やビデオ等の撮影機器が使える時代になった。ファインダーを通して自然に親しむのも一つの親しみ方であり、近くの雑木林をただ散策するのもよいだろう。豊かな対馬の自然は、そんなわたしたちの期待に応えてくれるはずである。

(小網小学校)

むしめがねNo.17 『壱岐・岳の辻のイシガケチョウ』

今年の夏休み、壱岐に帰省したときに岳の辻でイシガケショウを目撃したので報告します。

このときは、壱岐初記録だと思って大喜びしましたが、あとで「島の科学」発行の浦川さんの報告文に載っていることが分かりました。対馬と同じように、ごく最近になって壱岐に侵入してきたと考えられます。岳の辻以外では記録がないのですが、今後、分布を広げていくのではないのでしょうか。

・平成6年8月4日 岳の辻 1ex. 目

(境 祐輔)

オオチダケサシ新産地発見

ながどめ ひろし
永留 浩

オオチダケサシは7月中下旬から8月にかけて、淡紅紫色、紅紫色の花を花茎の上半部に螺旋状につけて咲き、花軸の上部には褐色の縮毛を密生している。草丈は12~50cmである。

ヒマラヤ、北中国、朝鮮、アムール、ウスリー、対馬まで分布している植物で、対馬以外の日本には発見されていない、植物地理学的に重要視される植物である。

対馬の自生地は佐護川、飼所川、竜良の3か所であったが、この発見で5か所になった。

(新産地)

1. 峰町三根川上流の群生地
2. 峰町三根佐賀の内川群生地

本種はユキノシタ科、チダケサシ属に分類され、この仲間は対馬には5種（対馬島誌：昭和15年）あるいは2種（長崎県植物誌：昭和55年；対馬の花：1985年）分布することが記録されている。したがって、オオチダケサシとは異なるチダケサシ属が自生しているのではないかと考え、最初（1988年）の発見以来、気をつけながら分類調査を行ったが、観察したもの全てがオオチダケサシという結論になった。

(久原中学校)

対馬のコノマチョウ属について

～クロコノマチョウの分布を中心に～

さかい よしあき
境 良朗

I はじめに

対馬では、クロコノマチョウとウスイロコノマチョウの2種のコノマチョウ属が記録されている。このうち、ウスイロコノマチョウは亜熱帯～熱帯系の蝶で毎年日本本土及びその周辺の島嶼で記録されるものの、土着することはできず、迷蝶と考えられている。

一方、クロコノマチョウは、対馬では比較的近年になって発見された種である。最初の記録は今から30年ほど前、厳原町からもたらされた。その後、対馬各地で散発的な記録が追加されるとともに、食草としてジュズダマとススキが確認されている。

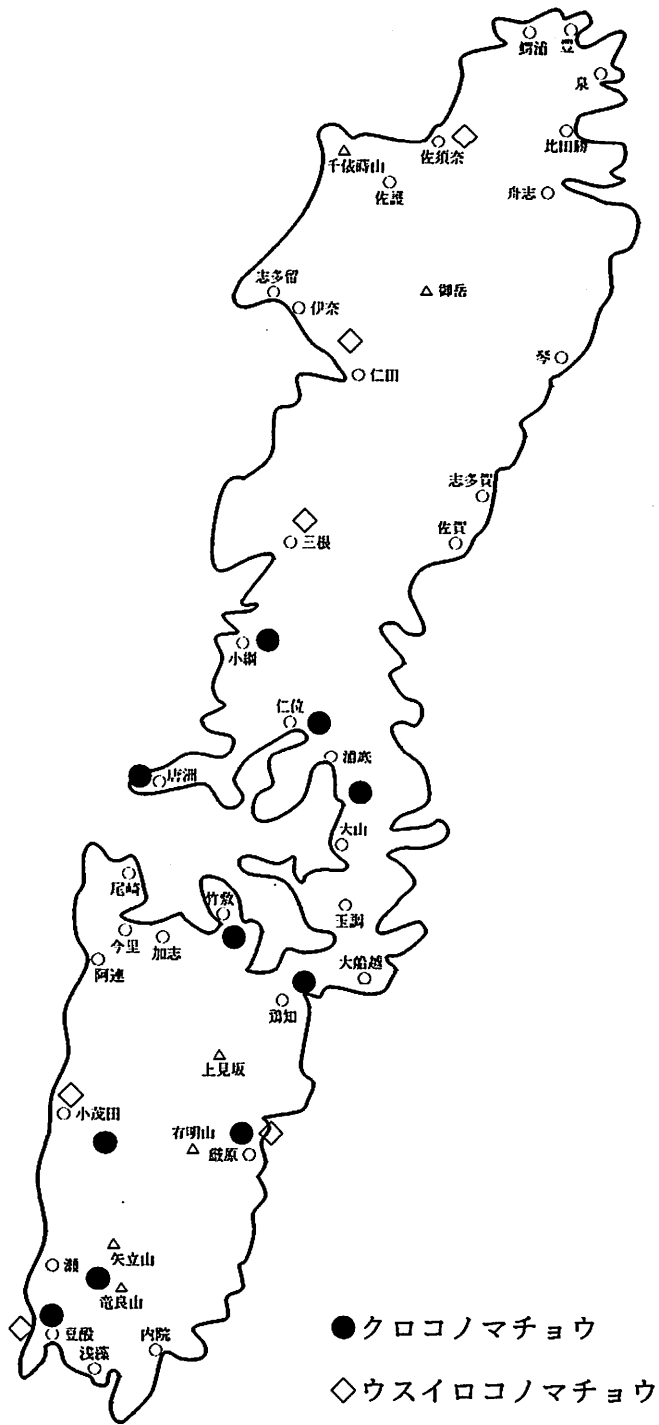
今回、豊玉町小綱において本種を多数観察することができたので、この機会に今までの記録をまとめるとともに、筆者の知り得た範囲の知見を述べてみたいと思う。ただ、分布図については、最近の対馬の蝶関係の報文にほとんど目を通していないので、他に記録があるものと思われる。

II 1994年の記録〔表1〕

- ・特に採集（目撃）地を記していないのは、全て「^{とよたま こづ}豊玉町小綱」である。
- ・採集者は境 良朗（Y o）、境 祐輔（Y u）、境 千壽子（C h）、境 志織（S i）で略記した。
- ・採集個体には、雄（♂）、雌（♀）の別を示した。

種名 記録		クロコノマチヨウ		ウスイロコノマチヨウ	
		採集個体	記録者	採集個体	記録者
1	8月 4日			1♂	Y o
2	8月 5日			1♀	Y o
3	8月 6日			1♂ 1♀	Y o
4	8月29日	2♀	Y o		
5	8月30日	1♂ 2♀	Y o	1♂	Y u
		2♀	Y u		
6	8月31日	5♂ 2♀	Y o	1♂	Y o
		1♀	S i		
		2♀	S i		
7	9月 3日	2♂ 1♀	Y o		
8	9月 4日	2♂	Y o		
9	9月 5日	1♀	Y o	1♀	Y o
10	9月 8日	1♀	S i	1♀	Y o
11	9月 9日	2♂ 2♀	Y o		
		1♀	S i		
12	9月10日	2♂	Y o		
13	9月11日	2♂	Y o		
14	9月16日	1♂	Y o		
15	9月20日	1♂ 1♀	Y o		
		18♂ 18♀		4♂ 4♀	

(表1) 1994年 クロコノマ・ウスイロコノマの記録



〔図1〕 対馬のコノマチヨウ属の分布図

表で分かるようにウスイロは8月上旬から見られ、1か月近い端境期の後秋型の♀が発生した。小網においてはウスイロは毎年発生が見られる。

一方、クロは8月の下旬から9月上旬にかけてが夏型の発生のピークであった。9月中旬になると大型で斑紋の鮮やかな秋型の♀が見られるようになった。この年は、4月に越冬個体（♀）を1頭採集していたので小網に生息していることは分かっていたが、これほどまでの発生になるとは予想していなかった。

9月2日の夕刻には、本種がジュズダマに3個産卵しているのを観察している。

Ⅲ 対馬での分布〔図1〕

現在まで、対馬で採集あるいは目撃された記録（報告文などの正式なものではないものも含む）の全てを図に表した。

図を見ると、クロコノマチョウは、ほぼ全島から広く記録がある。特に、ここ2、3年は姿を見かける機会が急激に増えた。このようなことは、数年前まではなかったことで、イシガケチョウ同様、近年の暖冬傾向が大きな原因になっているものと考えられる。

ただ、今回の小網での記録を除いては、採集観察された個体は1～2頭である。また、発生（幼虫・卵）が確認されたのは、巖原宮谷、瀬（幼虫）の2か所と小網（卵）である。

Ⅳ おわりに

いろいろ考察を加える予定だったが、単なる記録の紹介になってしまった。今年は迷蝶が全く不作だったので、身近なところに目を向けたのが幸いしたようです。目撃記録を教えていただいた杉さんに心より謝意を表します。

（小網小学校）

むしめがねNo.18 『昆虫・植物・蝶類ビデオ紹介』

会では会員の観察・研究内容をビデオに収録しています。現在まで制作されたビデオは次のとおりです。

ご購入の方は会事務局まで御一報下さい。

No	ビ デ オ タ イ ト ル	内 容	時 間
1	対馬の自然 ー蝶類編ー	対馬の代表的な蝶を名曲にのせ紹介します	約45分間
2	対馬の自然 ー陸橋の島の植物ー	大陸との陸橋の島の貴重な植物を紹介します	約20分間
3	対馬の花だより ー夏～秋ー	対馬の夏から秋にかけての代表的な植物です	約30分間
4	蝶の育ち方 ーイシガケチョウの一生ー	卵から成虫までの成長ドキュメントです	約30分間
5	対馬の自然 ー道端の植物ー	身近な植物を紹介します	約15分間
6	渡り鳥の島 ー対馬ー	対馬を訪れる代表的な渡り鳥を美しく紹介	約20分間

(杉 憲)

アカハラダカの観察会について

こくぶ ひでとし
國分英俊

アカハラダカは朝鮮半島で繁殖し、秋、春の渡りの時期に対馬に立ち寄ります。この時期に内山峠に行くとアカハラダカの渡りを観察することができます。ただし、春の渡りははっきりしておらず、5月上旬に渡りの途中に立ち寄っているアカハラダカを見ることができますが、秋に比べその数は少ないし、秋の渡りのように、タカ柱をつくることはありません。1980年から毎年9月15日、九州各地と連絡をとりながらアカハラダカの観察をしています。例年2～30人くらいの観察者があり、アカハラダカも天候によるばらつきもありますが、毎年、タカ柱を見ることができます。これまでの最大の渡りの記録は内山峠で1万羽を越えたこともありました。

内山峠はタカばかりではなく、あらゆる渡り鳥の中継地として適している場所であるようで、代表的なものとしてアカハラダカがあげられますが、ツルの仲間の渡りの通過地点でもあります。

内山峠に鳥の渡りの観察地を設けてはという話が、日本野鳥の会長崎県支部の鴨川誠先生によって言われたこともありますが、残念ながら土地交渉の問題もあって実現に至っていません。

(今里中学校)

むしめがねNo.19 『白嶽登山観察会』

今年は例年になく参加者が多く、130人を越えました。参加者が多い分細かい説明ができず、観察を目的に来られた人には申し訳ないと思いました。来年は少し考えてみたいと思います。

(國分英俊)

32	水上 靖	みずかみやすし
34	長岡 秀樹	ながおかひでき
35	山村 辰美	やまむらたつみ
37	江頭 晴司	えがしらせいじ
38	平山 年春	ひらやまとしはる
39	森 悦子	もりえつこ
40	宮内 富美子	みやうちふみこ
41	松藤 由美	まつふじゆみ
42	斉藤 順子	さいとうじゆんこ
43	大林 隆司	おおばやし
44	内山 政洋	うちやままさひろ
45	山田 賢治	やまだけんじ
46	山川 裕美子	やまかわゆみこ
47	川副 明子	かわぞえあきこ
48	前田 幸司	まえだこうじ
49	須川 英之	すがわひでゆき
50	前田 悠子	まえだゆうこ
51	黒田 このみ	くろだこのみ
52	澤志 泰正	さわしやすまさ
53	國分 愛子	こくぶんあいこ
54	佐伯 一輝	さいきかずてる

1995

会員住所録

対馬の自然と生き物の会

※・諸連絡用にご利用ください ・No.は会員番号です。
 ・誤記、変更があったらお知らせください。

作成：境

NO	氏名	(ふりがな)	住 所	電話番号	TEL(☎)
1	内野俊哉	うちのとしや			
2	浦川虎郷	うらかわとらさと			
3	浦田明夫	うらたあきお			
6	岡部虎男	おかべとらお			
7	國分英俊	こくぶんでとし			
9	佐伯正發	さいきまさはる			
11	境 良朗	さかいよしあき			
13	杉 憲	すぎあきら			
14	長瀬節雄	ながせせつお			
15	永留 浩	ながどめひろし			
17	平山俊章	ひらやまとしあき			
18	邑上益朗	むらかみますお			
23	小宮秀光	こみやひでます			
25	大野正男	おのまさお			
29	谷口秀樹	たにぐちひでき			
31	笹山万尚	ささやまかずひさ			

対馬の自然と生き物の会会則

- 第1条 (名称) 本会是对馬の自然と生き物の会と称する。
- 第2条 (目的) 本会是对馬の生物の研究、観察、調査を通して自然への理解を深め、自然保護意識の高揚をはかり、その情報や知識の普及、会員相互の親睦をはかることを目的とする。
- 第3条 (活動) 本会は第二条の目的を達成するために、次の活動を行う。
- 1 対馬の生物の分布、生態に関する調査
 - 2 会誌「ヒトツバタゴ」連絡誌「ひとつばたご通信」の発行
 - 3 研修会、談話会の開催
 - 4 各専門分野の研究の促進、情報交換
 - 5 自然観察会の開催、指導
 - 6 自然保護育成への働きかけ
 - 7 写真展の開催
 - 8 その他
- 第4条 (組織) 本会は本会の目的および活動に賛同する者をもって組織し、年齢、職業等を一切問わない。
- 第5条 (会費) 会員は別に定める会費を納めるものとする。
- 第6条 (役員) 本会に次の役員を置く。
- 会長 1名 運営委員 若干名
- 役員は会員の中から、その任期が終了する前の総会において選出され、会の基本方針に従って会務を執行する。任期は3年とし、再任を妨げないが本人の意向を尊重する。
- 第7条 (会計) 会計年度は1月1日にはじまり12月31日に終わる。

- 付則
- 1 本会の運営費は会費および寄附金等による
 - 2 本会の年会費は1000円とする
 - 3 本会の事務局を次の場所に置く

下県郡美津島町今里401 國分英俊 (09205-3-2007)

- 4 本会則は昭和61年1月1日より施行する。

*平成5年12月会名改称

◎◎◎◎◎ 編 集 後 記 ◎◎◎◎◎

今年はかつて経験したことのないような異常な夏で、雨が降らず、各地で渇水が問題となりましたが、対馬は何とか持ちこたえているようです。また、秋に入っても、数年来の暖冬傾向が続いています。

このような天候の変動が生き物に及ぼす影響はかなりのものがあるのではないかと思います。会員のみなさん、それぞれの分野ではいかがだったのでしょうか。

ところで、会誌も10号を数え、会の新しい名称と共に再スタートを切りました。会員数も50人台に乗り、特に女性の方の参加が増えました。(杉さんに感謝!) 来年は是非『1人1記事』をお願いいたします。「通信」「会誌」にどしどし近況をお知らせください。

*「対馬の植物」「対馬の鳥」「対馬の昆虫」の3編は、対馬の自然と文化 第22集(対馬の自然と文化を守る会 発行:1994)の報文を筆者の了解のもとに転載しました。

*今年、國分会長にがんばっていただき、「通信」は年間10号も発行されました。お一人でたいへんだったと思います。ご苦労さまでした。

*会員のみなさん、よいお年をお迎えください。

*
* **ヒトツバシロ** NO. 10 *
*
* 対馬の自然と生き物の会々誌 *
*
*
* 発行所 対馬の自然と生き物の会 *
* 長崎県下県郡美津島町今里401 *
* ☎09205-3-2007(圖分) *
*
* 発行日 1994年12月21日 *
*
* 編集・印刷 境 良 朗 *
*

目

次

○レッドデータブックに見られる		
対馬の昆虫類	浦田明夫	1～5
●むしめがねNo.15	境良朗	5
○対馬の植物	國分英俊	6～13
○対馬の鳥	谷口秀樹	14～19
●むしめがねNo.16	川副明子	19
○対馬の昆虫	境良朗	19～32
●むしめがねNo.17	境祐輔	32
○オオチダケサシ新産地発見	永留浩	33
○対馬のコノマチョウ属について	境良朗	34～37
●むしめがねNo.18	杉憲	38
○アカハラダカの観察会について	國分英俊	39
●白岳登山観察会	國分英俊	39
・会員住所録	編集部	40～41
・対馬生物研究会会則	編集部	42
・編集後記	編集部	